

日本中世禅林における杜甫詩受容

—中期における杜甫の困窮像について—

(平成二十八年七月二十八日受理)

太田 亨

はじめに

日本中世禅林において、初期（鎌倉時代末期から南北朝時代末期）の禅僧は、既に杜甫に関する事項を自身の詩文に詠出していた。例えば、杜詩の優れた点を詠出する際には、中国の詩話評を借用し、また杜甫の忠孝を称揚する際には、杜甫の名を直接に明記せず、故事や杜詩句を利用して^①いた。

中期（南北朝時代末期から応仁の乱頃）になると、宗旨に関係ない世俗一般の詩文について、その作製を禁ずるために杜詩句「文章は一小技、道に於て未だ尊しと為さず」が喧伝されることもあったが、貴族化は加速する。杜甫に関する画図が種種描かれ、そこに着賛されることが頻繁に行われた^②。また、禅僧は自身の詩文に、杜甫の情が厚い点や忠孝が優れている点について、直接に杜甫の名を出して詠出するようになった^③。

本稿では、中期の禅僧が杜甫の困窮像に目を向けていることについて取り上げる。禅僧がなぜ杜甫の困窮に着目し、どのように杜詩を消化した上で、自身の詩文に杜甫の困窮像を詠み込んだか検討する。なお、「困窮」語については、困り果てる意と、極めて貧しくて生活に悩む意とに大別される。以下の論考では両様が含まれる。

一、中期禅林における杜甫の困窮像

筆者は、杜甫に関する画図賛詩について検討した結果、禅僧が杜甫の困窮像に強く関心を抱いていたことに気付かされた。そこでまず今一度、画図賛詩において杜甫の困窮像について言及した例を挙げる。なお杜甫と困窮については、朝倉尚氏が既に論じており^④、これから挙げる資料の中には重複するものも存するが、特徴をより明確にするため、関係する資料は全て挙げることにする。

(1) 画賛詩に見られる杜甫の困窮像

初期の禅僧が杜甫に関することを詩文に詠出する場合、忠孝心を称揚することとはあっても、困窮を指摘したものは見受けられない。禅林の画賛詩において、最初に杜甫の困窮像を称揚した禅僧は、義堂周信（一三二五～一三八八）だと思われる。『空華集』巻一「杜甫」には次のようにある。

騎驢三十載、踏遍帝京春。

一夜沙鷗夢、九州胡馬塵。

驢に騎すること三十載、踏遍す帝京の春。一夜沙鷗の夢、九州胡馬の塵。義堂は「奉贈韋左丞丈二十二韻」の句「騎驢三十載、旅食京華春」（騎驢三十載、旅食す京華の春）を典拠にして前半を詠んでいる。描かれている画図より、

長い間都で驢馬に跨り、官職を捜し、さまよい歩いた杜甫を想起している。そして後半では、同詩の末句「白鷗没浩蕩、万里誰能馴」（白鷗 浩蕩に没す、万里 誰か能く馴らさん）とあり、自分を白鷗に喩えて、誰にも束縛を受けな
いと、飼慣らすのなら今の内と官への執着を見せるも、結局叶わなかったことを意識している。義堂は杜甫が結局のところ官職には僅かの期間しか就けず、大凡生涯を戦乱の中で生きたことを詠んでいる。この詩の跋文に義堂は次のように感懐を述べている。

余嘗讀老杜詩、感其方安史喪乱之際、不失君臣忠義之節。至若曰、文章一
小技、於道未為尊、是余感之深者也。今觀茲画、風帽蹇驢、使人慨然、投
筆起而吁。

余嘗て老杜の詩を讀むに、其の安史の喪乱の際に方りて、君臣の忠義の節を
失はざるに感ず。「文章は一小技、道に於いて未だ尊しと為さず、」と曰ふが
若きに至りては、是れ余が感の深き者なり。今茲の画を觀るに、風帽蹇驢、
人をして慨然として、筆を投じて起ちて吁かしむ。

義堂は賛詩の中で杜甫が戦乱の中で生きたことに触れ、跋文の中ではそうした
中でも君臣における忠義を忘れなかったことに感銘を受けている。そして杜甫
の「貽華陽柳少府」詩の句「文章は一小技、道に於いて未だ尊しと為さず」が、
自らの人生觀・文學觀に大きく影響を与えたことを述懐している。最後に画上
に描かれた杜甫の困窮した姿を見て、人を嘆き憤らせると結んでいる。義堂は
主として忠義心を称美しているが、その背景として戦乱の中で困窮した杜甫の
姿を意識している。

また義堂は「少陵」〔空華集〕卷四）でも次のように詠んでいる。

風塵漠漠鬢絲絲、許國丹心只自知。
巴草未醫驢子瘦、更添詩瘦最難醫。

風塵 漠漠 鬢は絲絲、國に許す丹心 只だ自ら知るのみ。巴草 未だ驢子の瘦

せたるを醫せず、更に詩瘦を添へて最も醫し難し。

ここでは杜甫が戦乱に巻き込まれ、髪が少なくなりながらも、忠誠心を忘れな
かったことを自然と知ることができるとする。また蜀でも瘦驢を飢餓から救え
ず、更には自身も詩文作製に励む余り、瘦せ衰えたのをどうすることもできな
かったことを言う。ここでも義堂は杜甫の困窮を強く意識している。

江西龍派（一三七五―一四四六）は「杜甫画像」〔統翠詩稿〕で次のよう
に詠じている。

秦蜀江山詩幾篇、暮年餓路付皇天。

秦蜀 江山 詩幾篇、暮年 餓路 皇天に付く。

ここでは先ず、杜甫が秦州や蜀地において自然を詠じた詩を数多く製したこと
について述べ、次いで杜甫が晩年困窮し、流浪したことに言及している。

瑞溪周鳳（一三九一―一四七三）は「題杜子美像」〔臥雲稿〕で次のよう
に詠じている。

詩酒自寬憂未消、風塵滿目鬢飄蕭。

詩酒もて自ら寛くするも憂ひ未だ消えず、風塵 滿目 鬢飄蕭たり。

杜甫の「可惜」詩の句「寛心應是酒、遣興莫過詩」（心を寛くするは應に是れ
酒なるべし、興を遣るは詩に過ぐるは莫し）を典拠としている。杜甫の目に入
る物は全て戦乱であり、髪は寂しく風に吹かれ、体はやつれ果てながらも、詩
と酒で自分の憂いを発散させようとするが叶わなかったことを詠んでいる。

南江宗沅（一三八七―一四六三）は「杜甫画像」〔漁庵小稿〕に次のよう
に詠んでいる。

獻賦雖佳納諫非、明時見棄擲朝衣。

爾來囊底無殘祿、蜀雨十年驢不肥。

賦を獻じて佳とすと雖も納諫非なり、明時棄てられて朝衣を擲つ。爾來囊
底 殘祿無し、蜀雨 十年 驢肥えず。

杜甫が長安で職を求めていた時期、「三大礼賦」を始めとする賦を奉ったところ、それが聞き入れられて右衛率府胄曹参軍に任命された。しかし、房琯の弁護のために天子を諫めたところ、それは聞き入れられず左遷されてしまう。前半では杜甫の長安滞在時期に着目している。そして以来杜甫の囊の底には禄が無く、蜀の地等を歴参するも、結局十年、驢馬に食べ物を与えられないほどの困窮の状況を味わったことを言う。

心田清播（？一四四七）は「浣花醉帰図」『聴雨外集』で次のように詠んでいる。

浣花花竹水西頭、毎日醉飯寛客愁。

浣花 花竹 水の西頭、毎日に酔ひて飯り 客愁を寛くす。

杜甫の「卜居」詩の句「浣花流水水西頭、主人為卜林塘幽。已知出郭少塵事、更有澄江銷客愁」（浣花 流水 水の西頭、主人為に卜す 林塘の幽なるを。已に知る 郭を出でて塵事少なきを、更に澄江の客愁を銷する有り）を典拠にしている。心田は、杜甫が浣花溪の寓居で毎日酒に酔い、憂いを発散させていたことを詠んでいる。

これら杜甫に関する画賛詩に見られるごとく、杜甫の代表的な特徴が「困窮」像なのである。

(2) 画賛以外に見られる杜甫と困窮

また直接に画図に附した賛に限らず、杜甫の困窮について述べた詩文は存在する。義堂は「讀李杜詩戲酬空谷応侍者」（李杜の詩を讀み、戯れに空谷応侍者に酬ゆ）『空華集』巻七）詩の首聯に次のように詠っている。

太白飄零子美窮、也知國乱血流紅。

太白は飄零し 子美は窮す、也た知る 國乱れ 血流れて紅なるを。

義堂は、李白が落ちぶれ、杜甫が困窮し、戦乱で国が乱れた結果、各地で血が

流されていることを詠んでいる。杜甫から受ける最も強い印象が、その困窮した姿であったことを知る。

「和答無倪」『空華集』巻八）では次のように詠んでいる。

堪笑杜陵窮到骨、尚能詩興動官梅。

笑ふに堪ふ 杜陵の窮して骨に到るを、尚ほ詩興を能くし官梅に動かさる。

ここではその困窮ぶりが骨の髄にまで到るも、かえって詩興は優り、官梅に動かされたことを言う。これは杜甫の「和裴迪登蜀州東亭送客逢早梅相憶見寄」詩の句に「東閣官梅動詩興」（東閣の官梅 詩興を動かす）とあるのを踏まえている。

『東海瓊華集』（兩足院所藏）の末尾部、他僧の詩を収集した箇所、義堂の「詠白髮」詩が認められるが、その詩に「閱尽窮愁感杜陵」（窮愁を閱尽して杜陵に感ず）とある。義堂が杜甫の困窮に起因する憂愁に強く関心を抱いていたことを示す。

惟忠通恕（一三四九一四二九）は「壯遊」『雲壑猿吟』で次のように言う。

可惜布衣窮子美、一生遺恨在搏桑。

惜しむべし 布衣の窮子美を、一生の遺恨 搏桑に在り。

これは杜甫の「壯遊」詩の「到今有遺恨、不得窮扶桑」（今に到るまで遺恨在り、扶桑を窮むるを得ず）句を典拠にしている。惟忠は杜甫が官職に就かず困窮するあまり、扶桑の国へ赴くことができなかったことに対して、一生恨んでいたことを詠んでいる。

邵菴全雍（生没年不詳）は「送人之三川」『邵菴老人詩』で次のように詠んでいる。

晚山稠重歸來路、行尽拾遺詩句中。

晚山 稠重す 歸來の路、行は尽くす 拾遺の詩句の中。

ここでは友人が三河国に帰って行く道の険しさを詠じ、その行程の険しさは杜

詩の詩句中にことごとく説き尽くされているとする。その詩は、三河国と三川の連想から、杜甫の「晚行口号」詩の句「三川不可到、歸路晚山稠」（三川到るべからず、歸路 晚山稠し）に拠ったものである。邵菴のように、杜甫が困窮しながら、各所を流浪したという印象を抱いていた禪僧は少なくないであろう。

惟肖得巖（一三六〇〜一四三七）は「讀樂遊園詩」（『東海瓊華集』）で次のように詠んでいる。

唐朝宴是樂遊園、銀榜花筵舞袖翻。

一罷唔咿多感慨、杜陵吟髻着霜繁。

唐朝 宴 是れ樂遊園、銀榜 花筵 舞袖翻る。一たび唔咿を罷め 感慨多し、杜陵 髻を吟ず 霜着くこと繁し。

前半部は、杜甫の「樂遊園歌」詩の「曲江翠幕排銀榜、拂水低徊舞袖翻」（曲江 翠幕 銀榜を排す、水を拂うて低徊し舞袖翻る）と「公子華筵勢最高」（公子の華筵 勢ひ最も高し）を典拠にし、宴の華やかさを詠じている。そして後半部では、惟肖は、一たび「樂遊園歌」を読むのを止め、杜甫が白髪頭で吟じた心境を推し量り、感慨を受けたとする。第四句については「登高」詩の句「艱難苦恨繁霜鬢」（艱難 苦だ恨む 繁霜の鬢）を踏まえていることから、杜甫が結局、晩年に至るまでまともに官職に就くことができなかったことを想起したものであろう。惟肖も杜甫に対して老いて困窮した印象を抱いている。

一曇聖瑞（生没年不詳）は「贊公土室」（『幽貞集』）で次のように詠んでいる。

知詩村遠騎驢至、破笠吟詩大瘦生。

詩を知る 村遠くして騎驢至るを、破笠 詩を吟じ 大いに「ただ」瘦生す。

この詩はあるいは画賛詩かもしれない。杜甫が賛上人を訪れた折を想起して詠まれたものであるが、困窮の象徴である驢馬に乗って訪れ、詩を製することでやせ衰えていることを詠出している。ここでは、飯頼山において李白が、心苦

して詩を製した杜甫の瘦せた姿を見て嘲笑したという「李白飯頼山頭逢杜甫」逸話を引用している。^⑥

一曇聖瑞は「次員送方堂座元皈越省師」（『幽貞集』）で「杜甫艱難倦拜鵑」（杜甫は艱難して拜鵑に倦む）と詠んでいる。この一句は、杜甫は常に天子の魂であるほととぎすを再拜していたが、「杜鵑」詩の句に「身病不能拜、淚下如迸泉」（身病みて拜する能はず、涙下りて迸泉の如し）とあるように、病みやつれ果てて、それができなくなったことを踏まえている。

作者不明の『雲巢集』の「次韻病中偶作」では、「杜曲風流只蹇驢」（杜曲の風流 只だ蹇驢なり）と、杜甫の詩は風流であるが、現実においては、びっこをひいた驢馬にまたがるほど苦難を得ていたことを指摘している。

以上のごとく、中期に至ると、禪僧の詩文に杜甫の困窮像についての言及が頻繁に見られるようになる。杜甫の名を直接に詠出し、困窮した姿と重ね合わせる詠出法は、中期より見られる詠出法の特徴である。その観点・詠出法の範を示したのは義堂周信と言えよう。

二、中期禪僧が杜甫の困窮に着目する理由

このように禪僧が杜甫の困窮した状況・姿を強調するのはなぜであろうか。瑞溪周鳳は「画驢贊並跋」（『臥雲稿』）で次のように指摘する。

予謂、驢之為物也、大抵処窮者之所用、而詩人多騎焉。杜甫賈島鄭縈等是也。

古曰、窮者而詩工也。由是觀之、詩與窮相待者乎。窮者所用詩人騎、良有以也。

予謂らく、驢の物為るや、大抵 窮に処る者の用ふる所にして、詩人多く焉に騎る。杜甫・賈島・鄭縈等は是れなり。古へ曰く、窮する者にして詩は工

みなり、と。是れに由りて之を觀るに、詩と窮とは相待つ者なるか。窮する者の用ふる所にして詩人の騎るは、良に以有るなり。

この中で瑞溪は、困窮した者が乗るのが驢馬であり、その代表的人物である杜甫・賈島・鄭綮等が非常に詩に工みであったことを例示している。そして詩を作ることに困窮とは相互に関係することを指摘している。朝倉氏もこれまでの内容について大凡触れている。

禅僧は、杜甫の詩が工みであることに關しては、既に初期の段階から着目していた。中期に至って、その原因を探求していく中で、困窮にそれを求めたのである。義堂周信も「次韻和答鹿苑諸友九首其六」(『空華集』卷六)で次のように言う。

詩人窮到骨、覓句動終宵。

詩人窮して骨に到る、句を覓めて動もすれば宵を終ゆ。

義堂は、ここでも詩人は困窮してその本質に迫ることができ、どうにかすると一晚かけて納得できる詩句を求めるとする。前掲「和答無倪」詩の「窮到骨」が杜甫であったことから、当該句の「詩人」・鹿苑諸友が杜甫に比されているのは確かであろう。義堂が杜甫の困窮に着目するのは、困窮と詩文の関係を認識していたからである。

禅僧は杜甫の困窮を否定しているわけではない。むしろ「窮すれば詩が工になる」と思考することにより、困窮を積極的に肯定している。禅僧は元来社会的な名利を度外視し、必然的に困窮である。この点からも、杜甫の困窮像に対して共感したのであろう。

三、中期禅僧の杜詩解釈―困窮の観点から

禅僧が杜甫の困窮に着目し、自身の詩文に詠出している例を取り上げ、その

理由についてみてきた。次いで、それら困窮像を創り上げる原因ともいえるべき杜詩を、禅僧はどのように読解していたのであろうか、その様相について検討する。

解釈の様相が最もよく表れているのは、中期を代表する禅僧・江西龍派(二二七五―一四四六)が講義したものを文叔真要が抄した『杜詩統翠抄』(以下『統翠抄』と略称)である。江西龍派は講義するにあたって、テキストに用いたのは『集千家註批点杜工部詩集』(以下『批点本』と略称する)であり、とりわけ劉辰翁の評点(以下「批語」と称する)を重んじた。

(1) 『統翠抄』に見られる杜甫の困窮像

「橋陵詩三十韻因呈縣内諸官」(『統翠抄』卷二)の句「客思回林垞」(客思林垞を回る)に対し、「以下、先生乞食シテ、在山野之状」(以下、先生乞食シテ、山野に在るの状なり)と抄し、杜甫の置かれた状態を「乞食」と形容する。当時にあつて「乞食」は、しばしば托鉢・行脚の僧侶のことを指すが、当該抄の杜甫の場合は、無位無冠のあまり止むなく滞留先で物を乞う生活状況のことを形容している。

「遣興五首其三」(『統翠抄』卷五)の句「有子賢與愚、何其挂懷抱」(子の賢と愚と有るも、何ぞ其れ懷抱に挂けんや)に対し、次のように抄する。

此言、甫自秦行三川、其間甚困窮。長安ノ名人ト有レ知者、但乞食ノ様也。

此れ言は、甫秦より三川に行くに、其の間甚だ困窮す。長安の名人と知ものも有り知らざる者も有れども、但だ乞食の様なり。

ここでも三川から秦州へ行く途中、甚だ困窮し、長安では知る人もいれば知らない人もいたが、ただの物乞いする有様であつたとする。

「嚴中丞枉駕見過」(『統翠抄』卷八)の句「寂寞江天雲霧裏、何人道有少微星」

(寂寞江天雲霧の裏、何人か道はん少微星有りと) に対し、次のように抄する。

無官^{ニシテ}居蜀、乞食シアルクヲ、知之、來訪。猶如天上イクラカ星ノ多ニ、其中知少微星様也。

無官にして蜀に居り、乞食しあるくを、之を知りて、來訪す。猶ほ天上いくらか星の多きに、其の中に少微星を知るが如き様なり。

節度使の嚴武は、蜀に滞在中の杜甫が官職に就かず物乞いする有様であったのを知り、心配して來訪したとする。蜀に滞在した時期は、杜甫にとって是比较的安定した生活を送ることができた時期とされるが、禪僧は「乞食」の状態であったとし、困窮した姿に変わりはないイメージを抱いていたようである。同時期の「嚴公廳宴同詠蜀道画図」(『統翠抄』卷八)にも「此マテ遠乞食シ、モツテキタヨ」と抄している。

「山寺」(『統翠抄』卷十)の句「窮子淨處、高人憂禍胎」(窮子淨處を失ひ、高人憂禍胎す)に対し、次のように抄する。

太白曰、窮子甫自謂。今五十二歳、生涯似乞食、穢土淨土ニアルカ。(中略)

太白曰く、窮子は甫自ら謂ふ。今五十二歳にして、生涯乞食の似^{ごと}く、穢土淨土にあるか。(中略)

太白真玄は、杜甫が生涯物乞いをする乞食のようであると形容している。

蜀を離れた後、夔州においても「峽口二首其二」(『統翠抄』卷十五)でも「吾乞食シマワルヲ、柏中丞等扶持ヲ煩フ」と抄し、「秋興八首其三」(『統翠抄』卷十五)でも「吾同学者ハ皆大名富貴ニ成、吾ハ夔州方乞食也」と抄し、「寫懷二首」(『統翠抄』卷十八)でも「甫在此乞食ノ様ナレトモ、無大事」(甫此に在りて乞食の様なれども、大事無し)と抄する等、杜甫の困窮した状態をしばしば「乞食」と形容している。

夔州を離れた後も、「舟出江陵南浦奉寄鄭少尹」(『統翠抄』卷十九)では「干戈乱故万国ニ乞食ヲスル也」と抄し、「宿鑿石浦」(『統翠抄』卷十九)でも「吾

カ如此乞食スルモ、俊異不居位故也」(吾が此の如く乞食するも、俊異の位に居らざるが故なり)と抄する等、杜甫のいずれの時期にも「乞食」の状態であったと解している。

禪僧は杜甫を「乞食」として形容するも、決して杜甫の詩作に対する評価を損ねているわけではない。むしろ乞食の状況・困窮であることを当然のこととして捉えている。「天末懷李白」(『統翠抄』卷五)の句「文章憎命達」(文章命の達するを憎む)に対し、次のように抄する。

文章―、万古文章与富貴与命仇也。自古文章之士命運多蹇滞也。

文章―、万古文章は富貴と命と仇なり。古より文章の士は命運蹇み滞ること多し。

杜甫の詩句を解した上で、古来、文章は富貴と命運とは仇敵であり、文章で名高い人物は不幸せで苦しむことが多いとする。禪僧は杜甫に困窮像のイメージを抱きながらも、文章の士であれば仕方ないと認識していたと思われる。

また「入奏行贈西山檢察使竇侍御」(『統翠抄』卷八)では次のようにも述べている。

凡飢寒ナ者コソ、文章ナントハ為業作之。

凡飢寒な者こそ、文章などは業を為し之を作る。

おおよそ飢え凍えたような人物こそ、文章の面などでは大成し、その作品を創り出すとしている。禪僧の意識裏には、むしろ困窮の状況を受け入れるようであれば、文章家としての事業を達成することはできないという観念を持ちながら、杜詩を解釈していたことが窺える。

(2)『批点本』における杜甫(詩)の困窮像

では、杜詩を解釈する上で、困窮と文章との関係を禪僧の観念裏に定着させたのは何であろうか。禪僧が杜詩を解釈するときに最も重視したのは、『集千

家注批点杜工部詩集』『批点本』における劉辰翁の批語である。

批語は、劉辰翁が杜詩の個々の作品に附した自身の評・感懐であり、短文であることが多い。そのため、個々の作品中における杜甫の困窮を指摘する批語は見られるが、文章との関係まで言及したものは殆ど無い。杜甫の困窮と文章の関係が見られるのは、『批点本』附録に収録された劉辰翁の題跋・序類である。それらは劉辰翁が杜甫に関して述べた内容となっている。「題宋同野編杜詩」『批点本』附録)では、杜甫の経歴を述べた後に次のように述懐する。

子美古今窮人、而倉卒患難、所遇猶若此。予非以其窮為可願、所遇為可羨也。以子美為可願可羨、則所遭又可知也。

子美は古今の窮人にして、倉卒として患難し、遇ふ所は猶ほ此のごとし。予其の窮を以て願ふべきと為し、遇ふ所羨むべきと為すに非ざるなり。子美を以て願ふべき羨むべきと為せば、則ち遭ふ所又知るべきなり。

杜甫が古今を代表するほど困窮し、おもいがけず悩み苦しむ、不遇を味わったとする。さすがに自身はそのような困窮や不遇を受け入れたくはないが、杜甫に倣い願ひ羨むべきことをすれば、これから遭遇する所のことを知ることができるとする。杜甫の詩を読んでその困窮の具体を理解すべきと考えている。劉辰翁が杜甫の困窮を肯定していることが窺える。

また、「連伯正詩序」(『批点本』附録)では、窮詩人を代表する杜甫の作品について次のように述べている。

古之窮詩人、称子美、郊、島。島以其命、而子美以其時。或曰、「時與命不同耶。」曰、「不同也。使郊、島生開元、天寶間、計亦豈能鳴國家之盛。而寒酸寂寞、顧尤工以老。則繇其賦分言之、亦不為不幸也。若子美在開元、則及見麗人、友人仙。在乾元、則屬從還京、掃鞭左掖。其間惟陷廊数月。後來流落、田園花柳、亦與杜曲無異。若石壕、新安之賭記、彭衙、桔柏之崎嶇、則意者造物託之子美。以此人間之不免、而又適有能言者、載

而傳之萬年。是豈不亦有數哉。不然、生開元、天寶間、有是作否。故曰、時也。非命也。」(中略)

古の窮詩人に、子美、郊、島を称す。郊、島は其の命を以てし、而して子美は其の時を以てす。或ひは曰く、「時と命とは同じからずや。」と。曰く、「同じからざるなり。郊、島をして開元、天寶の間に生ぜしむるも、計るに亦た豈に能く國家の盛を鳴らさんや。而して寒酸寂寞、顧だ尤も工にして以て老ゆ。則ち其の賦分に繇りて之を言へば、亦た幸ならずと為さざるなり。子美の若きは開元に在りては、則ち麗人を見、八仙を友とするに及ぶ。乾元に在りては、則ち扈從して京に還り、歸りて左掖に鞭うつ。其の間惟だ廊に陥ること数月。後來流落するも、田園花柳も、亦た杜曲と異なる無し。石壕、新安の賭記、彭衙、桔柏の崎嶇の若きは、則ち意ふに造物之を子美に託す。此の人間の免がれずして、而も又た適に言を能くする者有るを以て、載して之を萬年に傳ふ。是れ豈に亦た數有らざらんや。然らざれば、開元、天寶の間に生まれて、是の作有るや否や。故に曰く、時なり。命に非ざるなり。」と。

(中略)

劉辰翁は、杜甫の「時」と孟郊・賈島の「命」の違いを説明している。困窮を極めた詩人の代表として、まず杜甫と孟郊と賈島を取り上げる。孟郊と賈島について、二人がもし開元・天寶年間に生まれたとしても、國家にその名をとどろかせることは出来なかつただろうと評する。彼らは身にしみるほどの貧苦・寂寞を味わうことで、詩文における優れた技巧を磨き、年を取ったのである。その生まれつきの才によつてその技巧を發揮したのであるから、不幸とは言えないとし、時運ではなく、命運によるものと説く。その点、杜甫は開元においては、「麗人行」にあるように美しい婦人を見、「飲中八仙歌」にあるように八人の酒友と交わっている。乾元年間においては、天子が都に帰るのに従い、朝廷に帰れば天子を諫め、その間に数ヶ月鄜州にも難を逃れ、後に流落するも

田園の自然は杜曲と異なることはなかつたと指摘する。そして、乾元年間における傑作「石壕吏」や「新安吏」の見聞や、「彭衙行」や「桔柏渡」の山道の険しさと言ったものは、造物主が杜甫に託して詠ませたものであるとする。このように、人の世で免れることが出来ず、しかも偶々そこに詩文をよくする者がいて、その者によって発せられた詩文が集に載せられて、万年の後まで伝わる、これこそめぐり合わせであると言う。もしそうでなかったら、開元・天寶年間に生まれてこの作品があるかどうか。よって杜甫の詩文の功績は、時運によるものであって、命運によるものではないと締めくくっている。つまり、劉辰翁は杜甫の天寶年間から乾元年間における作品が窮詩人として優れているのは、時運のためであるとしているのである。

杜甫の作品を解釈するに際し、劉辰翁の困窮像に対する考え方を学んだ禅僧は、個々の詩について困窮像の観点から解釈するようになった。日本禅僧から見れば、杜甫の困窮する姿は無位無官でやむなく食を乞うて世を渡る「乞食」であり、その窮迫した状況から発せられる詩文だからこそ卓越していると認識していた。禅僧の杜甫困窮像は、杜詩解釈を重ねることで深まっていったと言えよう。

四、中国における杜甫の困窮像―禅林詩文の淵源

「窮すれば詩が工になる」といった文章観は杜甫のみに限ったことではない。劉辰翁が杜甫と困窮を結びつけた背景には、既に困窮と詩文とを関連させる文章観が中国文人間に浸透していたのである^⑧。これより中国における杜甫の詩文と困窮との関係について検討する。

そもそも「窮」について、『孟子』盡心上には次のようにある。

尊徳樂義、則可以囂囂矣。故士窮不失義、達不離道。窮不失義、故士得己焉。達不離道、故民不失望焉。古之人、得志、澤加於民。不得志、修身見於世。窮則獨善其身、達則兼善天下。

徳を尊び義を樂しめば、則ち以て囂囂たるべし。故に士は窮するも義を失はず、達するも道を離れず。窮するも義を失はず、故に士は己を得。達するも道を離れず、故に民は望みを失はず。古の人、志を得れば、澤民に加はる。志を得ざれば、身を修めて世に見る。窮すれば則ち獨り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす。

中国では古より、窮しても義を失うことなく、榮達しても道を離れずに広く天下を善く導くことができる賢者が尊ばれてきた。そのため(困)窮は、人物を見る場合の一つの判断基準とされていたようである。

(1) 杜甫の詩と困窮

宋代に入り、杜甫の卓越した詩を称揚すると同時に、杜甫の困窮を詠じた作品は多い。例えば歐陽修(一〇〇七―一〇七二)は、「堂中畫像探題得杜子美」の頷聯と頸聯で次のように詠んでいる。

杜君詩之豪、來者孰比倫。

生爲一身窮、死也萬世珍。

杜君は詩の豪にして、來者 孰か比倫せん。生きては一身窮と爲り、死して也た萬世珍とす。

ここでは、杜甫が詩においては卓越しながらも、生存中は困窮したことを詠んでいる。そして詩と困窮の関係を直接に指摘しているわけではないが、優秀な詩は誰も及ぶ者が無く、万世重んじられることも付与している。

王安石(一〇二一―一〇八六)は「杜甫畫像」で次のように詠んでいる。

惜哉命之窮、顛倒不見收。

青衫老更斥、餓走半九州。

惜しいかな 命の窮する、顛倒して收められず。青衫 老いて更に斥けられ、餓走 九州に半ばなり。

杜甫は天命が窮まり、それを変えることができず、中国全土の半分を飢えながら彷徨ったことを詠んでいる。この賛の最初には、「吾觀少陵詩、爲與元氣侔。力能排天幹九地、壯顔毅色不可求」（吾少陵の詩を観るに、元氣と侔しきを爲す。力は能く天を排して九地を幹り、壯顔 毅色求むべからず）とあり、杜甫の詩を称讃している。当時の文人の間では、杜甫の困窮と詩の優秀との関係が既に意識されていたものと思われる。

杜甫の詩を古今の詩人中の第一と見なし、且つ困窮と関係付けた評語として最も有名なのは、次に挙げる蘇軾（一〇三七―一一〇二）「王定国詩集叙」（『蘇軾文集』卷十）の言である。

古今詩人衆矣。而杜子美爲首、豈非以其流落飢寒、終身不用、而一飯未嘗忘君也歟。

古今に詩人衆し。而して杜子美を首と爲すは、豈に其の流落飢寒にして、終身用ひられず、而れども一飯も未だ嘗て君を忘れざるを以てに非ずや。

蘇軾は杜甫が困窮を味わいながらも忠義の節を失わなかったことを詩人第一の理由に挙げている。これは孟子の指摘「窮するも義を失はず」を杜甫に当てはめ、杜甫の人物を判断した上で述べられたものである。そして、この蘇軾の評は、中国宋代において最も支持されており、各文人が杜詩を評するに際して屢々引用している。さらに注目すべきは、日本禅林の義堂周信が「杜甫」（前述）に述べた杜詩評価の原因と一致している点である。

蘇軾と同様に、宋代を代表する文人・黄庭堅（一〇四五―一一〇五）も「題韓忠獻詩杜正獻草書」で次のように言う。

杜子美一生窮餓、作詩数千篇、與日月争光。

杜子美 一生窮餓し、詩を作るに数千篇、日月と光を争ふ。

黄庭堅も杜甫の困窮・飢餓の中で製された詩が、日月の光と争うほど優れていると評している。このように欧陽修・王安石・蘇軾・黄庭堅等が、杜甫の困窮と卓越した詩に触れている。そのため以後もこの二点の関係が焦点になっていることが多くなる。

史弥寧（生没年不詳）は「和黄雲夫武攸見寄韻」で次のように詠んでいる。

詩名千古杜陵翁、身不勝窮道不窮。

詩の名声が古今を通じて優れている杜甫は、その身は窮に堪えることができなかつたが、道は窮することがなかつたことを指摘している。杜甫の困窮と詩の関係を端的に纏めると言えよう。

包恢（一一八二―一二六八）は「答曾子華論詩」で次のように言う。

子美一生窮餓、固不掩於詩、而其志浩然、未始一日少変、故其詩光焰、不可磨滅。不可不考也。

子美 一生窮餓するも、固より詩を掩はず、而して其の志 浩然たれば、未だ一日の少変も始まらず、故に其の詩の光焰は、磨滅すべからず、考へざるべからざるなり。

包恢は杜甫が一生困窮・飢餓しながらも、その詩は卓越しており、これから先もその評価は色褪せることがないことを指摘している。

中国宋代において、杜甫が困窮であった点は、文人の間で既に自明のこととして共通に理解されている。また同時に、杜甫の詩が古今の詩の中で最も卓越しているという評価も確立している。これら二点が同時に詠出される資料は多い。

(2) 杜甫の詩と困窮——「困窮すれば詩が工になる」

杜甫の卓越した詩と困窮が結びついた具体的な要因を見てみたい。唐の孫樵(生没年不詳)は「與賈希逸書」(『孫樵集』巻二)で次のように言う。

文章亦然、所取者廉、其得必多。所取者深、其身必窮。(中略)杜甫、李白、王江寧、皆相望於窮者也。

文章も亦然り、取る所の者 廉なれば、其の得ること必ず多し。取る所の者 深ければ、其の身は必ず窮す。(中略)杜甫、李白、王江寧、皆な窮するに 相望む者なり。

文章面において、その取得者が清らかで慎み深ければ、得ることは多く、深遠であれば、必ずその身が窮してしまうことを言い、代表例の筆頭に杜甫を挙げている。唐代より既に杜甫の「窮」に着目し、それが故に卓越した詩文が製されたと考えている。

「困窮であれば詩が工みになる」という通念に最も影響を与えたものは、次に挙げる欧陽修(一〇〇七—一〇七二)の「梅聖俞詩集序」である。

予聞、世謂詩人少達而多窮。夫豈然哉。蓋世所傳詩者、多出於古窮人之辞也。凡士之蘊其所有而不得施於世者、多喜自放於山巔水涯、外見蟲魚草木、風雲鳥獸之状類、往往探其奇怪。内有憂思感憤之鬱積、其興於怨刺、以道羈臣寡婦之所歎、而寫人情之難言。蓋愈窮則愈工。然則非詩之能窮人、殆窮者而後工也。

予聞く、世に謂ふ 詩人は達すること少なくして窮すること多しと。夫れ豈に然らんや。蓋し世に傳ふる所の詩は、多く古の窮人の辞より出づるなり。凡そ士の其の有する所を蘊へて世に施すことを得ざる者は、多く喜びて自ら山巔水涯に放いままにし、外に蟲魚草木、風雲鳥獸の状類を見れば、往往として其の奇怪を探る。内に憂思感憤の鬱積があれば、其れ怨刺を興し、以て羈臣寡婦の歎ずる所を道ひ、人情の言ひ難きを寫す。蓋し愈いよ窮すれば則ち

愈いよ工みなり。然らば則ち詩の能く人を窮せしむるに非ず、殆ど窮する者にして後に工みなるなり。

欧陽修は、詩人は榮達することが少なく、窮することが多い、という主張に対して、つまるところ窮すれば窮するほど詩はますます工みになると反論している。この思考こそが以後の宋代を通じて広まったものと言えそうである。そして注目すべきは、その理由を追及していることである。一つには、困窮して大志を抱きながらも何も述べることのできない人は、喜んで山の頂、水辺に身を任せ、虫魚・草木・風雲・鳥獸の実態を見つめ、その奇怪な姿を探るからである。また一つには、心中に憂え憤ることが鬱積すれば、怨刺の気持ちを託して、羈臣寡婦の嘆きとして言い、人の情の言い表しにくいことを写し出すからである。前者の理由は、困窮すれば自然に目を向けるようになり、自然の助けを得て詩が卓越するということであるが、この思考は、杜甫にも当てはまるのではあるまいか。

趙蕃(一一四三—一二二九)は「近乏筆託之二張、求之於市、殊不堪也。作長句以資一笑」で、欧陽修の言を次のように支持する。

詩老作詩窮欲死、序詩乃得歐陽氏。
序言人窮詩迺工、此語不疑如信史。
少陵流落白也竄、郊島摧埋終不起。
是知造化惡鐫鑿、故遣饑寒被其體。

詩老 作詩 窮して死せんと欲し、詩を序するに乃ち欧陽氏を得たり。序に人の窮して詩は迺ち工みなりと言ふ、此の語 疑はざること 信史の如し。少陵は流落し白も也た竄れ、郊島は摧埋して終に起たず。是れ知る 造化の鐫鑿を悪み、故らに饑寒を遣りて其の體に被らしむるを。

困窮すれば詩が工みになると言う欧陽修の言を、杜甫・孟郊・賈島を見れば尤もなことであるとする。そして注意すべきは、そのように至らしめたのが造物

主の仕業であるとしていることである。従来指摘される杜甫の困窮像は、造物主より詩が工みになる助けを得るための一つの必要条件と考えていたのである。

趙蕃は「枕旁有杜集看其行役諸詩有感復書」でも次のように言う。

既將取詩名、先應歷詩窮。

不見杜陵老、飄轉一生中。

世學汝不嗜、而顧思此工。

既に將に詩名を取らんとすれば、先づ應に詩窮を歴るべし。見ずや杜陵の老、飄轉一生中の中。世學汝嗜まず、顧みて此の工みなるを思ふ。

詩窮とは詩を作ることによって困窮の状態になることをいう。文人を指してよく用いられ、ここでも詩の名声を得るには、まずその詩窮を経験するべきであることを述べている。その代表の一例として杜甫の名を挙げ、杜甫が一生流浪したことを指摘している。詩と困窮と杜甫の関係が示されているといえよう。

杜甫の詩と困窮の関係が明確に示された例は、この外にも存する。宋誼（生没年不詳）は『草堂詩箋』の「杜工部詩序」で次のように言う。

唐之時、以詩鳴者最多、而杜子美迥然特異。（中略）惜乎適人之不見采、而子美不見知於上、愈窮而愈工。然世之所傳、尚有遺落而不完。

唐の時、詩を以て鳴る者最も多けれども、而るに杜子美迥然として特異なり。（中略）惜しいかな適人の采を見ず、而して子美上に知られず、愈いよ窮して愈いよ工みなり。然れども世の傳ふる所は、尚ほ遺落有りて完からず。

宋誼は杜甫の詩が唐代において傑出していることを指摘した上で、杜甫の詩においては、窮すれば窮するほど工みになったことを論じている。

宋誼と同様に、困窮であるが故に詩が工みになったと指摘するものに、次に挙げる陳郁（？～一二七五）の『藏一話脞』の詩話がある。

作詩作文、非多歴貧愁者、決不入勝處。三閭阨而騷獨歩。杜少陵愁而詩冠

古今。（中略）非常人可到、良有以也。

作詩作文は、貧愁を歴ること多き者に非ざれば、決して勝處に入らず。三閭は阨くろみみて騷は獨歩なり。杜少陵は愁ひて詩は古今に冠たり。（中略）常人の到るべきに非ざるや、良まことに以有るなり。

陳郁も、貧困や憂愁を激しく味わった者が、詩文において優れた妙所を見出すことができるとし、杜甫の詩が古今随一であると称している。

何夢桂（一二二九～一三〇三）も『潜齋文集』の「宋梅堂詩序」で次のように言う。

子厚以謫而文工。屈原以放而騷工。杜子美以蹇而詩工。嗚呼文以窮而工、文之不幸也甚矣。

子厚は謫せらるるを以て文は工みなり。屈原は放たるるを以て騷は工みなり。杜子美は蹇くましむるを以て詩は工みなり。嗚呼、文は窮するを以て工みなれば、文の不幸なること甚し。

ここでは、柳宗元と屈原と杜甫の例を挙げ、困窮することにより詩文が工みになることを説いている。このように、杜甫が困窮を味わったが故に、詩が古今随一になったという思考が確立されていたことが判明する。

宋代、中国文人間に「窮すれば詩が工になる」という文学観が浸透していた。そのため、文人それぞれは、最も優れた詩人として杜甫を称揚する際、その理由の一つを「困窮」に求めた。結果、自身の詩文に杜甫に関することを詠み込む場合、その卓越した詩を称揚すると同時に、困窮について言及するようになったのであろう。

まとめ

日本禅林において、初期から中期にかけて、禅僧の文学観・文筆活動は変化した。初期では外集的要素を排除していたのに対し、中期になると外集的要素を容認するようになった。禅僧の作詩に対する意識は高まり、作詩の上達に必要な要素を追求した結果、「困窮」という答えが見出されたのであろう。中国では、宋代詩学において「窮すれば詩が工みになる」とする文学観が確立し、その代表として杜甫が存在していた。そのため、日本禅僧は中国における風潮を受け入れ、さらにテキスト『批点本』の評者・劉辰翁の文学観を確認した上で、杜詩を読解し、その困窮像を味わったのであろう。こうして得られた杜甫像が自身の詩文に詠出されたのである。

【注】

- ① 拙稿「日本禅林における杜詩受容―禅林初期における杜詩評価―」（『中国中世文学研究』第三十九号・二〇〇一年）・拙稿「日本禅林における杜詩受容―忠孝への関心（初期の場合）―」（『中国中世文学研究』第四〇号・二〇〇一年）参照。
- ② 朝倉尚「禅林における杜甫像寸見―『文章一小技』と『杜甫忠心』」（『岡山大学教養部紀要』第十一号・一九七五年）・拙稿「日本中世禅林における杜詩受容―禅の宗旨と文学観の連関をめぐって―」（『禅から見た日本中世の文化と社会』ペリかん社・二〇一六年）参照。
- ③ 拙稿「日本禅林における杜詩受容について―中期禅林における杜甫画図賛詩に着目して―」（『中国中世文学研究』第四十五・四十六号合併号・二〇〇四拈）参照。
- ④ 拙稿「日本中世禅林における杜詩受容―中期における杜甫の情に対する関

心―」（『広島商船高等専門学校紀要』第二十九号・二〇〇七年）・拙稿「日本中世禅林における杜詩受容―忠孝への関心（中期の場合）―詩文詠出の様相―」（『中国中世文学研究』第六五号・二〇一五年）参照。

⑤ 朝倉尚「禅林における杜甫像寸見―『文章一小技』と『杜甫忠心』」（『岡山大学教養部紀要』第十一号・一九七五年）・朝倉尚「李白飯頼山頭逢杜甫―逸話―」（『禅林の文学―中国文学受容の様相―清文堂・一九八五年）参照。

⑥ 前掲⑤朝倉尚「李白飯頼山頭逢杜甫―逸話―」参照。

⑦ 前掲⑤参照。

⑧ 浅見洋二「中国の詩と風景―『江山の助け』をめぐって―」（『アジア遊学』第三一号・勉強出版・二〇〇一年）には、宋代、困窮した者に自然（江山）から至高な気が降り、清浄な心がそれに反応し、卓越した詩が生まれるという思考が存したとする。